

令和元年 11 月 24 日 (日)

仙台弁護士会館

『あたりまえの権利と権利擁護』

ドキュメンタリー映画『精神病院のない社会』上映会・振り返り

29 名 / 36 名 回収

参加者 職 種	社会福祉士 (13)	介護福祉士 (11)	看護師 (6)	その他 精神障害施設理事 (1) 設計士 (1) 介護支援専門員 (4) 医師 (1) 会社員 (1) その他 (3)
------------	------------	------------	---------	--

※複数回答あり

1. この映画を見て感じたこと、思ったこと

- ・衝撃的で言葉が出ない。
- ・1960 年からこれまで何故なくなるのか？
- ・奴隷のような体験＝介護でも共通していることではないか？（介護記録「～させる」、プライバシーの保護）
- ・介護者が利用者に命令してはならない、奴隷ではない。
- ・何かを言い訳にして人を人として扱わないことはあってはならない。
- ・もっと、自分が今相手の人になっていることを振り返り、見つめなおしていく。
- ・相手の話を聴く事が大切。
- ・「今迄の精神疾患者」＝「支配しておちつかせる」という事が、医療とされていたんだと思う。「痛い」「怖い」等の思いをさせる事以外にも「心の支配」をすることが人として希望もなくなる。
- ・精神病院のあることがあたりまえと何も考えずに生きてきた私には、表題に関してあまり疑問が当初起きなかった。この映画の申し込みをした頃、ある事件を知りました。精神病院を入退院していた 40 代男性が、同居していた母親を殺したというおそろしいものでした。その男性を知る知人は、退院させた病院が悪いと話していましたが、もし、入退院の環境でなく、もともと、トリエステのような環境であり、地域と共に暮らしていける、友人達と相談のできる環境であれば、事件は起きなかったのではないかと思います。何か迷惑をかけそうな人は施設や病院に入れてしまえば良いのではなく、権利と権利擁護があればと切に思いました。
- ・精神科病院については知らない部分が多い。自傷のおそれのある人を入院させ、薬で治療し、コントロールできるようになったら退院できると思っていた。拘束はあってはならないと思う。やむを得ない場合、同意を得て許されることになっているが、私自身、安全の為、危険回避、非代替性などの理由で、拘束をするラインが説明出来ない。
- ・率直に怖いと感じました。
- ・自分のことなのに、自分の意思や意見を無視され、自分の人生を人に決められてしまうのは恐ろしいと感じました。近代的な日本でも、精神科病院では今も閉鎖病棟が当たり前のようにあり、家に帰りたくても帰ることがゆるされない、又、慢性患者を長期間入院させておくことで、私立の病院の経

営が成り立つということを知り、更に恐ろしいと感じました。

- ・自分や自分の大切な人がこのような目に遭ったらどうしようと不安になりました。
- ・狂気と理性を半分ずつ持っている。
- ・医療は自由、錠と鉄格子は入らない。→印象的な言葉
- ・イタリア市民の反応はどのような経過をたどったのか？
- ・日本の改革は進むのか。
- ・世界のベッド数の 1/5 が日本が占めていることは驚き。
- ・日本の精神病院の治療とは何だったのかと強く感じました。治療という名の虐待と差別でしかなかったのではないかと感じました。イタリアの現在は、社会全体が精神的な病気を理解し、1人ひとりの人に寄り添って社会生活を送っている事により、成立しているのだと感じました。日本社会の悪い考え方、環境が精神的な病の方達の症状を悪化させていると思いました。
- ・社会を動かすエネルギーが小さくないと難しい。日本は経済最優先！
- ・内科や外科疾患と何で区別されるのだろう。
- ・日本でもイタリアと同じになる事を期待したい。
- ・宗教観？のちがいでしょうか。日本ではこの1つの改革がなぜできないのか。誰も好きで病気になる人はいない。心ある医療者が欲しい。薬づけにしてほしくない。
- ・認知症や高齢者施設でも同じ事と感じた。
- ・精神科病院を母体とした大学病院で勤務していた経験があり、複雑な気持ちで観ました。急性期で入院される方々を見ていると精神病院をなくすことは難しいと思っていましたが、プロセスを踏みしゅきみを作れば可能であると感じました。35 年程前 Pt を地域へ帰す支援をしていた事を思い出しました。看護としては色々ありましたが、先進的取組みも行なっていたんだと降りかえりました。
- ・自分達が正しいという思い込みで、簡単に人を人として見るができなくなるんだと感じました。
- ・他の所ではどうなのかを知る機会がない、「知らない」という事の怖さ、目の前で起きていることが、当たり前になってしまふんだとも感じました。
- ・変と思うか思わないか、人や環境によっての感覚の違いを感じました。そして、何とかしたいと思っても、一部の人だけが思っても何とかなるものではないけど、1人ひとりの力や積み重ねが大事なのだと思いました。知らない、気づかない、感じないことは恐いと思いました。
- ・本人のニーズを聞きながら、治療も選択できなければならない。さりげなくあるセンターや宿泊が大切である。認知症、障がいと地域の中でホーム（共同生活）中心に予算、民間にも落とせば、暮らしやすくなるのかな・・・病院に金をかけたい。そもそも訪問とかにすれば・・・※字幕があればもっとよかった。
- ・病院で行なわれていた対応が、想像するよりも大変ひどい状況だった事にびっくりした。更にそれが今の日本でも続いている可能性が高いという事にも大変驚いたが、その反面、自分が仕事についている高齢者福祉の場面に置きかえて考えてみれば、映画の内容までとはいかなくても、当事者の事を支援する側の都合でコントロールしたり、対応の大変な人扱いをすいて、レッテルを貼るなどまだまだ近くにあると感じ、そのような考え方もどんどん修正していかないといつの間にか無意識のうちに、介護現場でも映画の中の事に近い事を起こしてしまうのでは・・・と心配になった。
- ・精神が不安定であっても、自由を奪われることなく、自由に安心ができる環境下で治療が受けられ

る仕組みにうらやましいと思った。地域で支える仕組みと人が大切だと考えられた。

- ・精神病院があることが、当たり前という中でくらししてきたので、ない社会があること、精神病院がなくなっても問題ないということを知って衝撃をうけました。普段かかわる精神病院でも閉鎖病棟があったり身体拘束されている患者さんを見ますが、このような状況が変えられるなら変えていけばいいのではないかと思います。座敷牢の文化についてもふれられていましたが、精神病に限らず、日本にはどこかに閉じ込めてかくしておくという考えが根本的にあるかもしれないと感じました。
- ・こんな時代があったのか・・・とびっくりする反面、今の時代も近いことがおこなわれている施設もあるのではないかと。
- ・精神病院をなくすためには、人々の理解が重要、正しい知識を伝えていき普通に一緒に支援しあいながら生活できる様になればいいが、長い期間、時間が必要と思う。
- ・今の日本の精神科病院での対応、病気とではなくその人と向かい合って関わって欲しいな・・・世界の1/5の病床が日本にある事残念。
- ・現在もこのようなことが行われてることが信じられない。冒頭のインタビューで登場する女性の体験から信じられない。今は、厳しい条件があって、どうしてもやむを得ない、そうしないと本人やまわりの人の身体や命の危険性がある場合だけだと思っていた。
- ・無くすべき。なぜ日本はできない。卒直になぜ続いてきたのかわからない、不思議。
- ・人権なんて存在しない。家畜と同じような扱い。本当に信じられない。自分がこどもの頃・・・確かに狂人が入るところというイメージがあった。
- ・精神科病院の中の患者の自由はどこにあるのか。始めのほうの女性の入院の話が衝撃的だった。これが現実ということ。病気にされ、話も聴いてもらえず、措置入院になる。支配される。日本が世界の1/5の病床があるという事実、知らなかった。
- ・精神病院は今でこそきれいなどころがあるが、汚い、何よりも人間として扱われない！今も変わらないところが多いと思う。何故なのか・・・Drを始めスタッフの人達の心が人として見ていないからだと思う。ある病院に行った時カレンダーが全く季節のページでないものが貼られていた。私はすごくいやな気持ちになった。何でもいいのだと。物に対しても人に対しても。ということはこの映画をみて思い出しました。もっと小さい頃からあたり前に身近に障がい者がいけばいいのにと。
- ・病院が高度化するから「病気ができる」と感じました。変な人はダメな人ではないと思います。生きること、生活することに支援が必要な時に必要なぶんを支援でき、いつでも受け入れることができるのが専門職の連携なのでは？それをどのように感じ、選択するのは本人なのだから。
- ・精神病院の歴史をふり返ることができました。昔から続いている事、知っていても何もすることができない想いです。つつい仕方ないと思ってしまう自分がいるのも確か。イタリアのように日本も精神病院ではなく、自由に過ごせ皆がサポートしてくれる様になると幸せだなあとと思います。
- ・支援する側とされる側の上下関係的なものが読み取れました。さらに言うなれば「管理する人」と「物」、当事者はただの「物」としてしか扱われていないと感じた。また、最初の方にあったが、女性の話はまったく聞くことなく、夫と警察の話のみで決められた措置入院。夫に対しての入院説明内容の不十分さも本来は知るべきことも、はぶかれていることが分かりました。最後の方では精神病院の闇的なことがありましたが、介護（高齢者）でも同じことが言えると思います。サービスを利用する人を囲い込み、本当にその人のことを思ったサービスが提供されているのか、その様な部分

が重なりました。

- ・あたりまえのように人権侵害とも言える、本来は治療するはずの病院で行なわれてきた(きている?) 実態を改めて理解した。
- ・イタリアのような状況にもっていくには、まず専門職であるもの達が、チームとなつてとりくむ必要があると感じた。まずは、今から出来ることを考えて行動をしていきたいと思った。
- ・今医療の名の下になつて恐ろしいことが平然と行なわれているのだろうと思った。精神的疾患とその他の疾患についての人間の理解と捉え方が違い、人間としての自由と尊厳が奪われている。これまでその立ち位置にいた自分が残念に感じた。世の中の意識が変わるためには何が必要なのだろうと思った。自分に何がこれからできるのだろうか。
- ・精神病院に対する日本と海外の事情がこれほど違うのかと驚きました。
- ・精神疾患の疑いがあるから、疾患による暴力や大声などの行為が出るかもしれないからなどのすべて推測でしかないことに対して、しばったり、何の薬か本人に知らせないまま投与して、コントロールしようという恐ろしさがあった。何を解決しようとしているのかが見えない。
- ・「管理」「支配」「～あるべき」は相手の本当を見失う。思いを上手に伝えられない、表現できないからこそ、周囲から理解されないからこそ「問題」として取り上げられてしまう。ていねいに相手の話を聞くことは大切だと思う。
- ・日常の中でも相手を支配しようとする自分も居るので気をつけたい。
- ・浣腸日は排便有無に関わらず、浣腸され拘束されていた光景も・・・。
- ・ドイツでは精神科病院へ入院するには、裁判官が出向いて様子を見て許可しなければ入院できない。
- ・トリエステでは精神科病院のベッドが6床で在院日数も10日ほど。日本は200日→あまりにも日本の精神疾患がある人への人権意識が低いことがわかった。その原因として、民間の病院が多いというのが大きな理由とはいうが、改善していかなければならないと思う。
- ・本人のことなのに、本人に聞かない、説明しない、簡単に身体拘束されてしまうということに、なぜなのか・・・?と思うが、病院だけでなく私達が働く介護サービス事業所でも同じようなことが起きている。
- ・ドロックロックに関しては、当法人でもあると感じており改善できていない状況もあり、スタッフや医師と話し合っていきたいと思った。
- ・支配され続けると自分らしさを失っていく。患者という人間になってしまうと思った。
- ・日本の精神医療の遅れを改めて感じた。根本には日本の精神医療政策に対する問題があると思う。改革するとなれば医療関係のみならず、地域の人々の精神科、精神患者に対する偏見をなくし、理解が必要と思われる。

2. その他、人としての「あたりまえの権利と権利擁護」について思ったこと

- ・介護する側、される側の立場ではないことを、職員と理解、共有していけたらと思った。
- ・聞くこと。自分の価値観を押し付けない。
- ・できないことをできるように(できるようにしようとすると、人を支配、コントロールしようとする)するだけでなく、できないと前向きに発信する必要があるのでは?
- ・イメージ、あたりまえ→どうしたら良いかと考えるのではなく「病気だから」という勝手なイメージ。自己中心的な考えはだめ。基礎知識は大事。意識していくこと、そのために振り返る。

- ・「仕方ない」という説明にならないよう相手の思いや気持ち、相手の方の周囲の方々の気持ちも、しっかり話を聴いて行きたい。
- ・知らないこと、わからないことを知り、学びそして周りに発進して行くことにより、「権利と権利擁護」を発進して行く。その人をその人として対応し、自立と自己選択していく「あたりまえのある権利」を考える。
- ・認知症の人が入院する時、転落しないように体幹を拘束され、点滴を抜かないように拘束されるのか、入院時に説明され同意書にサインを求められる。医療現場では仕方のないことかもしれないが、介護施設でも安全のためという理由で拘束が行なわれている。当事者主体であることを忘れてはならない。
- ・一生義務を果たすことでアップアップ。権利という言葉は私に無い。
- ・人としてのあたりまえの権利とは、自分はそこにここに居ても良いんだと感じて生きて生活できる事だと思えます。ありのままの自分が受け入れられる事。本人の思いに寄り添った支援ができる人になっていきたいと思えます。
- ・自民党の政権ではムリ？では、どの政権？→ない。
- ・本人の意向が無視されている。
- ・役所の公正中立があたり前になれば、1歩近づく？
- ・病気を理解し適切に発信して行く。精神科を特別視しない。かかわるプロセスを大事にして行く。
- ・精神科のサービスが良くわからないので、もっと知る機会があると良い。
- ・包括支援センターが24時間機能すると良い。
- ・自己決定支援を再度認し常に意識し利用者に関わっていきたい。
- ・本人の抱えている「障がい」を理解したうえで、本人と話し合う事が大事だと感じました。
- ・無意識ということがあるとすれば怖いことだと思えます。時々振り返っていきたいと思えます。
- ・本人が選択して実行できることを支援すること。その人と話をする。大切。
- ・自分の役割は「意思決定支援」なんだ。ゴールはその人その人で違い、向かう方向はどこなのか、どこを希望するかはその人その人で違うし、まずその本人としっかり話をし一緒に考える。という事を、強く意識していく事を常に意識していきたい。
- ・本人と話し合うという機会や、そのために関わっている人と話し合うということなど、本人の思いをくむための関わりを工夫していきたい。
- ・人には基本的に人を支配したいと思っているということを、常に心においていけないと思いました。人をわかろうと努力したいと思いました。
- ・人それぞれ1人の人として認め合うことでその人を尊重していくこと大切。
- ・いつ自分自身が逆の立場になるかわからないということを常に考えて行動したい。
- ・自分の苦手な人ともコミュニケーションをとり、相手の気持ちを感じとるようにする。
- ・その人がどう思っているのか、どうしたいのか本人の意向をきくことが大事ということを改めて感じた。家族の意向で決めない。
- ・自分とはとにかく相手の方をわかろうと努力することが大事だと思いました。
- ・相手の方とよく話をすること。「でも」とってはだめ。
- ・自覚すること。自分も人権を侵害する可能性は0ではないので。

- ・普通って何？自覚をする。権利侵害するかもしれない、しているかもしれないことを自覚しながらケアする。
- ・自分を自覚する。
- ・相手を理解しようとする。
- ・なにかを決める時に、相手を抜きに決めない事が大切だと思う。決める時に相手が何らかの理由で決められなければその支援を大切にすれば良いと思う。
- ・「自分が自分らしく生きていきたい」という気持ち・・でも困った時に誰かに相談し前へ進める・・こんな気持ちが大切にされる社会。
- ・同じ人間が相手の自由を奪う権利はないと思いながら、相手のあたり前の権利を忘れてしまっているので意識しながら積み上げていきたい。
- ・人として元々備わっている人権が、侵されていることが知られていないこと、もっと知るべきことと思った。あたり前のことを、あたり前にするために、していくために、1人ひとりが常に意識していく事が必要と改めて思った。
- ・本人ではなく持っている病気のことや通っている病院だけで、その人を見てしまっていることが、人をもの扱いにしてしまう原因なのだと感じた。
- ・〇〇のAさんではなく、見なければ、聞かなければいけないのは目の前のAさんであることを、大切にしていきたい。
- ・苦手な人とも話をしていく。→いい距離感で自分を大事にしながら。
- ・相手の話をしっかり聴き、話し合いをする時間を増やす。
- ・煮つまるといい関わりができないので、息抜きをしながら本人の話に耳を傾けていきたい。
- ・わからないことはわからないと言える自分。
- ・本人のことは本人に聞いて、本人と話し合うことが大切だと思った。しかし「話し合う」ためには本人のことを知っていく努力が必要なので、病気や障がいについての知識も必要だと思いました。
- ・知らず知らず権利侵害にならないために、自分をふり返れるような機会（今回の研修のような機会をもつ）を持つことが大切だと思いました。